

総合的な学習の時間
で活用するための



地域診断法WS マニュアル

小学校高学年用ESD 持続可能なまちづくり学習プログラム

総合的な学習の時間で活用するための「地域診断法WSマニュアル」
(小学校高学年用ESD 持続可能なまちづくり学習プログラム)

発行年月日：2019年3月31日

開発・発行：滋賀県立大学まちづくり研究室（鵜飼研究室）

編集・制作：鵜飼修、小島なぎさ

協力：多賀町立大滝小学校、地域診断法研究会（近江地域学会）

お問い合わせ先：tel : 0749-28-9853 MAIL : ukai.o@office.usp.ac.jp

HP : <http://eco-minka.com/wp/>

このマニュアルは、公益財団法人 博報児童教育振興会（博報財団）第13回「児童教育実践についての研究助成」を受けて制作されました。



目次

00 はじめに	1
01 地域の構造:基本的な考え方	3
02 地域診断法のしくみ	4
03 授業の実施要領	5~6
04 手法	7~10
05 指導計画(案)－大滝小学校の場合－	11~12
06 授業の展開	
・全体	13~14
・第1回	15~16
・第2回	17~18
・第3回	19~20
・第4回	21~22
・第5回	23~24
・第6回	25~26
07 実施事例	27~33
あとがき	34

はじめに

開発の背景：持続可能なまちづくり、日本らしさの継承へ

情報網や交通の発達で、世界中どこにでも行くことができ、どの国の人ともつながることができるような時代になりました。AIやロボットなどの技術開発もますます進んでいくことでしょう。こうしたグローバル化した社会で、私たち日本に住むものにとって大切なことは、「日本らしさ」の継承だと思います。日本という東洋の辺境の島国という特殊な環境で、長い年月で育まれた文化、伝統、暮らしが世界に誇れるアイデンティティとなります。しかし、日本全体は人口減少社会に突入し、こうした暮らしを紡いできた地方から人材が流出します衰退していくのが現状です。

日本らしさを継承する人財(あえて財とします)をどのように確保するのか。その一つの方法として、子どもの頃から「自分の地域」に「つながり」と「関心」をもつてもらい、将来、進路の選択や、転機が訪れたときに、「あのとき地域でこんな提案したな」「あの地域にもどって何がしよう」という記憶や思いを持ってもらうことが大切だと思います。グローバル化した社会の中で、自分自身の中に「地域」を持つてもらえば、持続可能なまちづくり、日本らしさの継承への一助になると考えます。

本マニュアルについて：まちづくり学習プログラム

本マニュアルは、こうした思いを背景に、小学校高学年の総合的な学習の時間で活用するために開発した「まちづくり学習プログラム」のマニュアルです。具体的には「地域診断法ワークショップ(以下、地域診断法WS)」という手法を用います。地域診断法WSでは、グループや外部の方々と関わりながら、客観的な情報を収集・整理・分析・統合し、「あらたな発想」を生み出すという一連の思考を訓練することで、地域を舞台に、児童の主体性、コミュニケーション力、そして創造力を育みます。

まちづくり学習プログラムの効果：実践事例から

このプログラムの実践の効果は、実践事例の結果から以下の点が挙げられます。

児童

- 地域の特徴を学ぶことができる
- 地域の環境と暮らしとのつながりについて
創造的な考え方を学ぶことができる
- ヒアリング、まちあるき、ワークショップを通じて
大人との対話、協働作業を体験できる
- 地域の本質的な特徴を見出すことができる
- 地域の本質的な特徴と自分自身がすべき事
(将来含む)をリンクして考えることができる



教員・関係者

- 教員自身が地域の特徴について
理解を深めることができる
- 教員が地域住民とのネットワークを
広げることができる
- 地域と小学校が連携した地域学習
実施体制を構築することができる



本の紹介



活用した手法の本

「地域診断法」の理念と
ノウハウが書かれた本



教員用
(本マニュアル)

「地域診断法」を活用した
まちづくり学習プログラムの
小学校教員用マニュアル



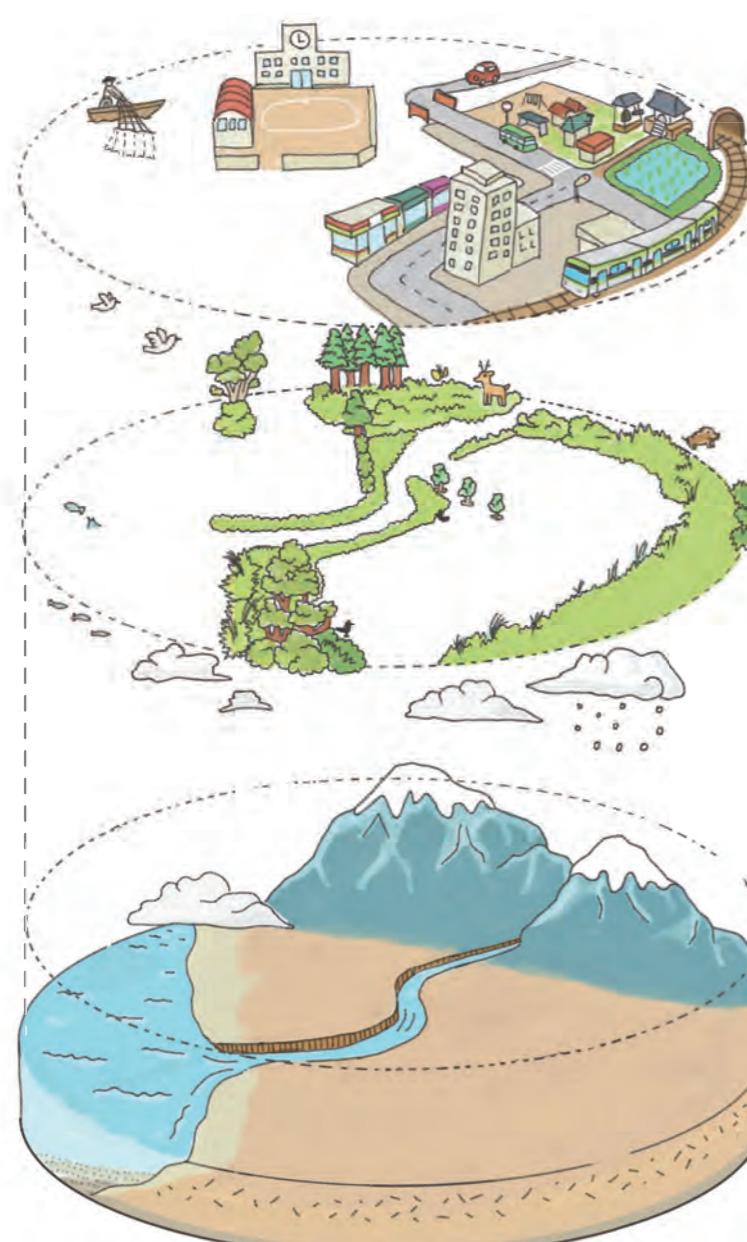
副読本児童用

小学校高学年用
マニュアル

01 地域の構造：基本的な考え方

プログラムに取り組む前に、基本となる「地域の構造」についての考え方を紹介します。

私たちの暮らす地域には、そのベースとして、山や川、海、土地などの自然環境があり、そこに吹く風や雨があり、その環境に適応できた植物や動物が生きています。そこに食糧や安全を求め人々が暮らすようになり、社会・文化が生まれ、現在の形になっています。現代の私たちは、自然環境に依存しない暮らし方が可能となつたため人間中心の生活感覚を持ちがちですが、もともとは、自然環境、植物や動物からの恵みで、暮らし方が成り立つていました。農業や漁業、林業といった一次産業や、文化はその象徴といえます。この視点を整理すると、地域には、地形や地質といった「地学」的特性、天気などの「気象」的特性、動植物などの「生態」的特性があり、そしてその上に文化や暮らしといった「人為」的特性があるという構造があることがわかります。このような地域の構造の捉え方をすることが「地域診断法」を実践する際の基本的な考え方となります。



人為

建物、文化、乗り物、生活文化、人、人間関係、家族など

生態

動物、植物、鳥、魚、昆虫など

気象

天気、日照時間、風、降雪量、降水量、気温、気圧など

地学

地形、地質、山、海、川など

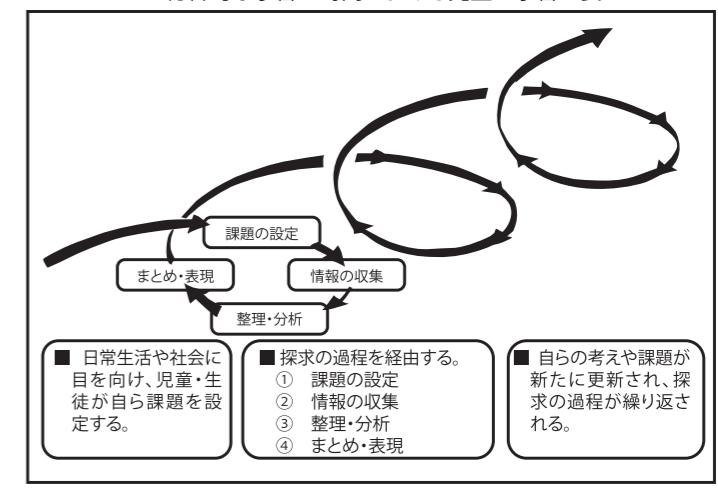
02 地域診断法のしくみ

地域診断法とは、前頁の視点のように、生態学を重視した視点と地域を様々な情報に分解、整理、分析・統合することにより、地域の特徴を明らかにする手法です。この手法を応用し、その理念と仕組みを継承しつつ、地域住民参加型で簡単に実施できる手法として開発されたのが地域診断法WSです。WSは5つのステップで構成され、ヒアリングやフィールドワークを行いながら、地域を様々な情報に分解する作業と統合する作業を通じて「未来に継承したい〇〇地区のXXXX」は何か、すなわち地域の目指すべきビジョンを明らかにします。

地域づくりでの現場では、それぞれの地域の特性を活かした地域づくりが求められています。その際には、地域がビジョンをもち、そこに向かってバックキャスティングで活動を行うことが必要となります。地域診断法WSは、この方向性を見いだす手法として実践されています。

地域診断法WSのステップは、総合的な学習の時間の探求のプロセスと整合しています。地域の本質的な特徴は何か?という課題設定からはじまり、ヒアリングやまちあるきで情報を収集し、整理・分析し、成果をまとめて、交流し、地域住民に向けての発表を行います。地域診断法WSの一連の活動の中で探求のプロセスが「繰り返され」、児童の創造性が育まれるとともに、地域を知り、地域とのつながりも育まれます。

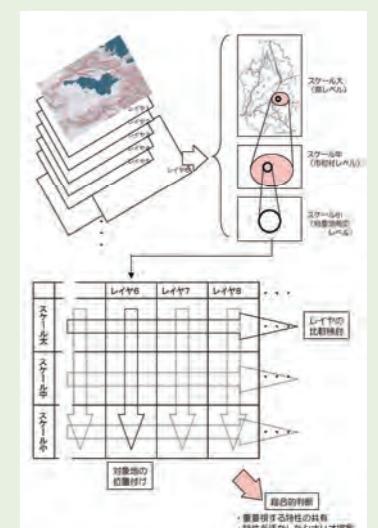
総合的な学習の時間における児童の学習の姿



出典:小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編(平成29年6月 文部科学省) p.9より 筆者作成

地域診断法 コラム

地域診断法は1960年代にアメリカのランドスケープアーキテクトであるイング・マクハーグにより開発された「エコロジカルプランニング」を基礎として、1990年代に大成建設株式会社において開発されました。エコロジカルプランニングの手法は、生態学的な視点に基づいて開発地域を評価する手法です。地域診断法では、このエコロジカルプランニングの生態学を重視した視点と地域を様々な情報に分解する手法を応用し、地域情報を3段階のスケール(マクロ、メソ、ミクロ)、4つの側面(地学、気象、生態、人為)で情報を収集し、3行×4列を基本としたマトリックスに整理し、分析することにより、地域の特徴を明らかにする手法です。この地域診断法の有意点は人間の営みと地域の環境的特性の「つながり」を再認識できることです。すなわち、その地域の特徴は地域の環境と人々の暮らしとのつながりにあり、それが何であるかを見出すことができるのです。



エコロジカルプランニングによる地域診断手法

03 授業の実施要領

1 授業時限数

地域診断法WSの実施に必要な時限数は**14時限(45分×14コマ)**です。ワークショップを行うので、授業は2時限連続を基本に構成します。ただし、「まちあるき」は午前中4時限分を利用します。過去の事例では**6,7月に2,2,4,2,2時限で実施**していました。総合的な学習の時間には、各種行事なども設定する必要が生じると思われますが、2ヶ月間程度で集中的に行なうことが望ましいです。なお、この時限数には地域への発表の時間、発表のための準備時間は含んでいません。地域診断法WSを実践した、滋賀県多賀町立大滝小学校の場合は、秋の「大滝小まつり」での発表をゴールとして、1学期に地域診断法WSを実施し、最終回に表現方法を議論・決定し、2学期にはその準備作業を行っていました。

4 体制と事前準備

地域診断法WSは、**担任が一人で実施しようとしてはいけません**。学校側は、地域をフィールドとした学習を通じ児童が成長することをねらい、地域側は、将来を担う児童の意識づけや、地域と学校との交流による地域活性化をねらいとしている中で、双方がwin-winの関係を構築することに意味があります。したがって、地域側の担当者を役場等に配置してもらい、連絡調整は役場で行ってもらう体制をとるなどの工夫が必要です。

もちろん、担当教員はじめ、学校側も実施体制を整え、地域とのコミュニケーションをとることが大切ですが、役割分担を明確にして、役場等に任せられるところは任せた方が実りある授業が実施できます。大滝小学校の実践では、町役場の大滝地区担当職員が、協力してくれる地域の人員の調整や、招待などを段取りしていただくことでスムーズに行なうことができました。

2 他教科との連動：カリキュラムマップの核として

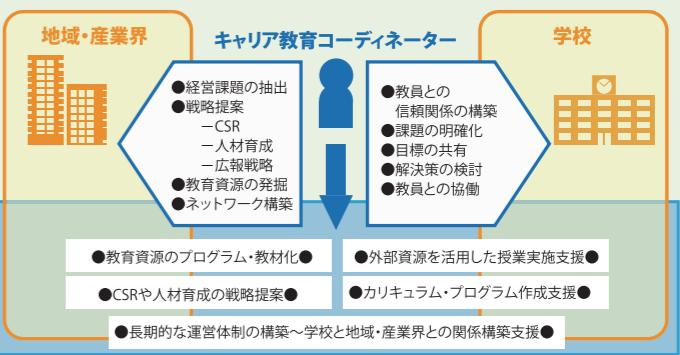
総合的な学習の時間を核として、他教科との連動したカリキュラムマップを作成する事例が見受けられますが、この地域診断法WSの実施でも同様に、他教科との連携が可能です。例えば、社会での歴史の学びを、地域にスポットをあてた学びとして連動させる、国語での新聞づくりを、地域診断法WSでの成果物の広報媒体とするなどが考えられます。大滝小学校の場合は、各地域の紹介しありづくりを国語の授業と連動させて行いました。地域を活用することで様々な教科と連動させることができますので、学びが深まる効果的な学習計画を立てください。

3 児童の評価

地域診断法WSを通じて、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・発表を繰り返し、児童がこの思考・実践方法を習得することが大切です。地域診断法WSの結果はその時得られた「情報」に左右されるので、結果の善し悪しではなく、情報に対して主体的に考え、得られた結果について自信をもって主張できるようになることが大切です。したがって、**児童の評価については、一人一人の特性に応じて「何ができるようになったか」を評価してあげてください。**

キャリア教育コーディネーター コラム

「キャリア教育コーディネーター」という仕事を知っていますか？ キャリア教育コーディネーターとは、「地域社会が持つ教育資源と学校を結びつけ、児童・生徒等の多様な能力を活用する「場」を提供することを通じ、キャリア教育の支援を行うプロフェッショナル」です（経済産業省『キャリア教育コーディネーター育成ガイドライン』p3）。



出典：一般社団法人キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会「キャリア教育総合情報サイト」<http://www.human-edu.jp/coordinator>より筆者作成

島根県海士町では、小・中学校のキャリア教育コーディネーターが配置されており、相互に連携を図りながら、学校と地域の間に入り連絡・調整を行っています。また、同県邑南町では、矢上高校魅力化コーディネーターが配置され、高校の魅力化のみならず、小・中学校の教育のコーディネートやアドバイスを行っています。教員の負担軽減や、地域とのより良い連携やキャリア教育の実施に大きな役割を担っています。

キャリア教育コーディネーター

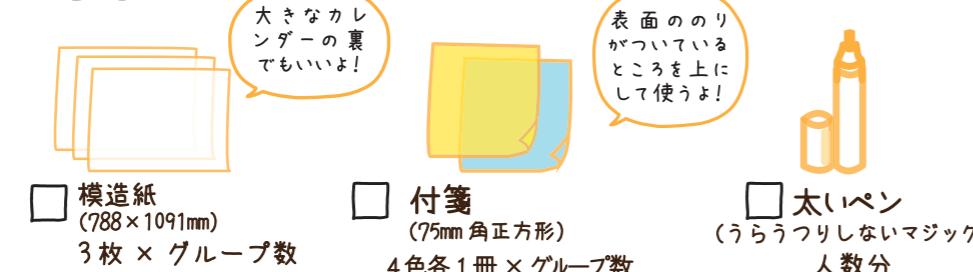


04 手法

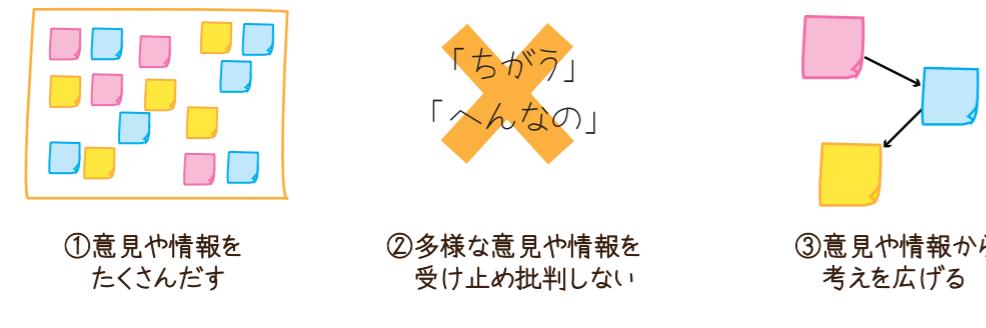
1 地域診断法WSで用いる手法について

地域診断法WSで用いる手法は「付箋をつかった情報整理方法」と「フィッシュボーン」の2つです。「フィッシュボーン」については、類似の方法が存在しますが、地域診断法WSでのオリジナルな手法です。これらはすべて、付箋、模造紙、裏表紙のない太いペンを使用します。一連の作業は、①意見や情報をたくさん出す、②多様な意見や情報を受け止め批判しない、③意見や情報から考えを広げるというルールがあります。これは、児童1人1人が意見を出しやすくする場づくりのためです。

* つかうもの



* ルール

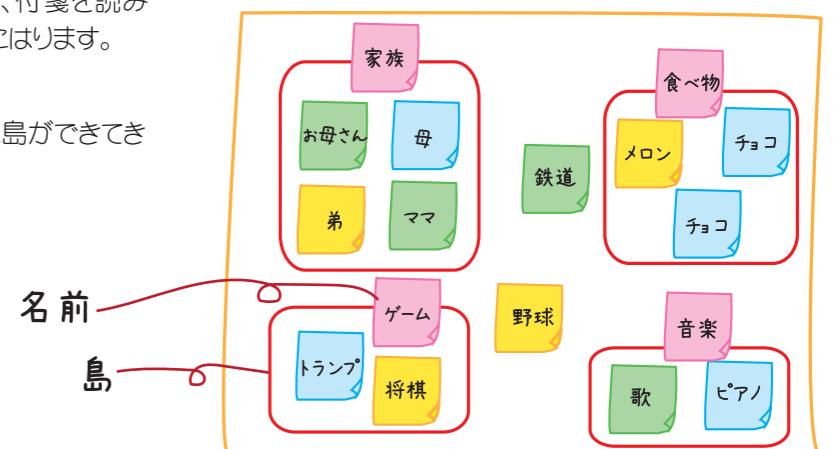


2 付箋をつかった情報整理方法

基本的な手順は、情報aと情報bの関連性を整理していく事にあります。整理の方法としては、「情報のグループ化」→「名前づけ」と、名前同士の関連性の解読・発想(つながりを考える)の2点です。地域診断法WSではこの手法を活用しています。名前同士のつながりを考えることがポイントになりますが、これは過去の児童の様子から「連想ゲーム」的な発想をすると良いと思われます。例えば、「山」と「川」が「なぜつながるか」を考えると「山」があって、そこに雨が降って、「川」に流れいく」というAとBの間に何かしらの作用Cを入れて結びつけるパターンや、「広い土地」があるから「農業」が盛んである、「農業」があるから「祭り」があるなど、Aが原因となってBという結果があるという因果関係のパターンを、児童に示すと考えやすくなります。

* 情報整理のやりかた

- ① 決められた時間内で、テーマについて、1人1人が情報をたくさん書き出します。1枚の付箋に一つのことを書きます。書いたら手元に並べておきます。
- ② 時間が来たら、1人1人が順番に付箋を読み上げて、模造紙にはっていきます。そのとき他の人は、似ているものがあつたら「私も」と言って、付箋を読み上げて、その付箋の近くにはります。
- ③ 繰り返していくと、自然に島ができることがあります。
- ④ みんなの付箋が張り出されたら、全体をみわたして、もっとまとめられないか、この島はわけた方がいいなど、整理します。
- ⑤ 最後に、ピンクの付箋で島に名前をつけます。
- ⑥ テーマに対するグループの答えを島の名前をつかって説明できるようにしましょう。



* つながりの考え方

パターン1：AとBの間に作用Cを入れて結びつける



パターン2：Aが原因となってBという結果がある



副読本 (p.13) での例



「川」、「きれいな水」、「山」、「イワナ」の付箋があるとします。それぞれの付箋のつながりは、例えば、「山」からわき出た「きれいな水」が「川」になり、そこには「イワナ」が住む、と考えられます。つながりを考えたら、左図のように、線や矢印、言葉を別の付箋に書いて情報をつなげていきます。

04 手法

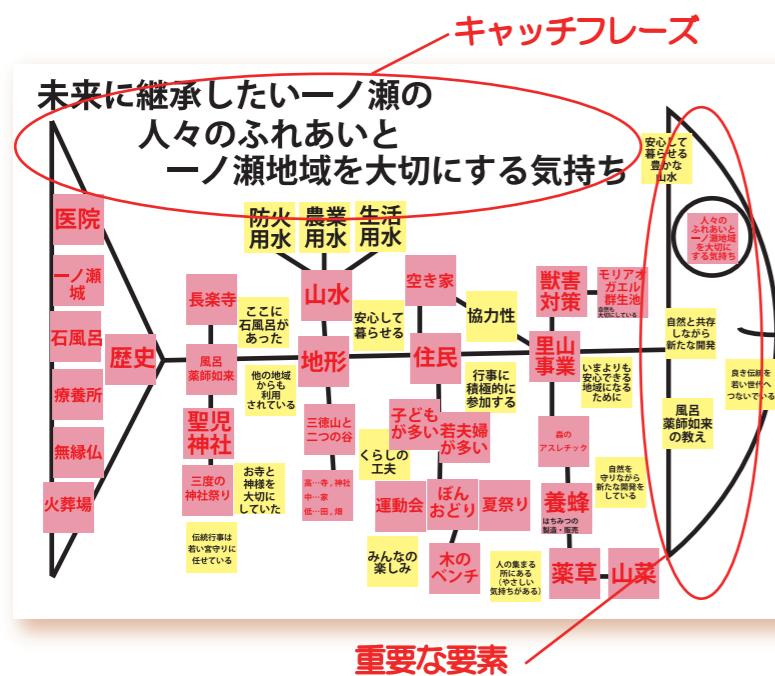
3 フィッシュボーン

地域診断法WSでは、最終型としてフイツシユボーン状に情報を整理します。フイツシユボーンでは、背骨が軸となって、その端に、尾びれ、頭が位置します。背骨からは枝骨が広がります。背骨=地域にとって重要な要素、尾びれ=重要な要素の根源的要素、頭=重要な要素を統合した内容という構成となります。

* 手順

- ① これまでに得られたピンクの付箋の中から地域は
とて特に大切なものを「背骨」に置きましょう
 - ② 背骨のピンクの付箋を「尾=根源となるもの」から
「頭=未来に継承したいもの・こと」へ、つながりを考
えて並べ替えましょう
 - ③ 「背骨」につながる付箋を「枝骨」に置きましょう。そし
て、付箋同士のつながりを説明できるように線でつなぎ
ましょう
 - ④ フィッシュボーン全体を表現するキャッチフレーズを考
え、書きましょう

* キャッチフレーズ



キヤツチフレーズは、集めた情報とそれらの整理・分析の結果から、結論としてこの地域の特徴は何か?をひとことで言い表すフレーズです。語彙が少ない児童にとっては大変難しい作業ですが、何が大切であるのか、自分たちは何を伝えたいのか、を考えさせ、自分たちのことばで地域を表現できるよう支援してください。

大滝小学校6年生のフィッシュボーン

大滝小学校6年生のフィッシュボーンを例に、どのような考え方でそのキヤツチフレーズ(=未来に継承したいもの・こと)が生まれたのか紹介します(『』内は付箋を表します)。



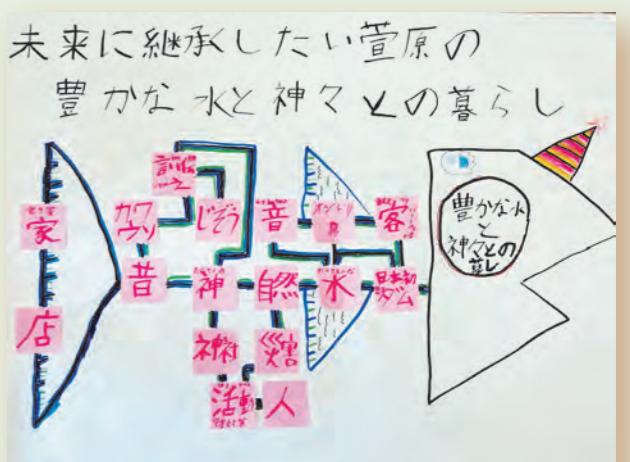
藤瀬地区

「多賀町藤瀬地区は、未来に継承したい藤瀬地区の水と緑の豊かさと誰もがあたたかい気持ちでいられる暮らしだす。『山から見る景色がキレイ』は、高いところにあるお寺や神社から見る景色がキレイでした。『2つにわかれた地域』は、橋から向こう側は昔からある藤瀬で、橋から手前は新しく広がった藤瀬です。『自然が多い高取山』では、いろ

いろいろ『植物』が生えてるし、草木が植えられています。たくさん『木』が植えられているので、木のアスレチックがあります。『きれいな水』は、山から出ている湧き水や魚が住みやすい環境があるからです。『土地に合わせた田んぼ』では、斜面が多いので、棚田が多いです。それに、心地よい風やきれいな景色があります。『優しい人』では、『地域の人』がすれ違うと挨拶をしてくれます。『新しい人』では、外国人や子どもや若い人たちが藤瀬の魅力を知ってもらつたり行事にたくさん参加してくれたりします。『みんなが集まる行事』では、運動会は『地域の人々が交流する場』であつたり、草むしり、地蔵盆、夏祭りは『子どもたちの行事』です。『水と緑の豊かさ』とつけたのは、『自然が多い高取山』と『きれいな水』からです。(キャッチフレーズの)『誰もがあたたかい気持ちでいられる暮らし』は、『優しい人』があたたかい挨拶や、すれ違つただけで声をかけてくれること、『みんなが集まる行事』や『地域の人々が交流する場』もあるのでこうしました。この、今ある藤瀬地区のいいところを、未来にも継承していきたいと思いました。」

萱原地区

「多賀町萱原地区は、『昔』は『店』や『家』がたくさんありました。けれど、『店』は火事などで無くなり、『家』は移住する人が増え、『空き家』が増えました。その前に、『昔』『カワウソ』には『言い伝え』があって、二条坊に化けて人々を騙すという言い伝えがありました。乳飲み地蔵と六地蔵などの『地蔵』の言い伝えもあり、たくさんの『神』もいました。1つの『神社』に3人の『神』がいて、『神をまつる活動』から湧き出た『すごくきれいな水』、心地よい風、『鳥』ました。オシドリというすごくきれいな『鳥』が、『日本』が分かりました。釣りやバードウォッチングをしに来るは)『豊かな水と神々との暮らし』だと思いました。



未来に継承したい萱原の
豊かな水と神々との暮らし

1つの『神社』に3人の『神』がいて、『神をまつる活動』や『自然災害を防ぐ人たちの活動』もありました。『自然』から湧き出た『すごくきれいな水』、心地よい風、『鳥』たちのピーピー鳴く『音』が鳥たちの合唱のように聞こえました。オシドリというすごくきれいな『鳥』が、『日本初の犬上川ダム』にいたので、『きれいな水』だということが分かりました。釣りやバードウォッチングをしに来る『観光客』もいっぱいいました。なので、(キャッチフレーズは)『豊かな水と神々との暮らし』だと思いました。

05 指導計画(案)－大滝小学校の場合－

2 単元目標

見つける力	追求する力
地域の特徴やくらしについて理解し、自分の住む大滝を大事に思う気持ちをもつことができる。 地域の課題や未来に継承したいものが何かを見つけることができる。	地域の人にインタビューしたことや、まちあるきしたことについて付箋に整理、グループ化することで考えをまとめることができる。 班で協力して学習し、意見交流を通して考えを練り上げることができる。
表現する力	コミュニケーション力
地域の未来について考えたことを自分の言葉で発信することができる。 伝える相手や内容に応じて、適切な方法を選んだりまとめ方を工夫したりして自分たちの提案をわかりやすく伝えることができる。	地域の人や班の友だちと自分から関わろうとすることができる。また、友達と協力して提案内容を考えたり表現したりすることができる。 友達と話し合う中で、互いの考え方の良さや違いを認めることができる。

1 身に付けたい力

総合的な学習の時間では、班での活動や大滝小まつり(保護者や地域の人に学習発表する場(本マニュアル32pを参照))を通して主体的に学んだり、自分の思いを発信したりすることの楽しさを感じ、それを他教科でも生かせるようにしたいと考えている。本学習の導入では、教師側から提案する形で始まった。しかし、本来は日常生活における課題を発見することから始める必要があるため、それを捉えるよう、児童の考えを交流する時間を設けるようにしている。その中で、「まずは自分たちが大滝をすきになること」が大切だという思いをもって学習を進めることを共通理解として始めた。

本学習は、地域の方、大学の方、役場の方などたくさんの人と交流する機会を設定した。少人数で生活している児童にとっては、これらの他との関わりは、コミュニケーション力を育てるにもつながる。また、交流を通して児童の地域に対する考えを深め、自分の考えに自信をもって発信する力をつけたい。また、本学習では、付箋に自分の考えを書き、班で出た付箋をグループ化していく情報整理の方法を用いる。付箋に書くという活動は、自分の考えを明確にしておかなければ書くことができない。付箋をグループ化するためにはつながりや類似点を見つける力が必要である。そのためには、多面的に物事を見る必要になってくる「未来の大滝に継承したいことは何か」という課題に対する結論を考える過程で、友だちの意見を参考にしたり、聞いたことを発展的に考えたりする姿を期待したい。活動の中でヒントになる視点を個々に伝えたり班での話をまとめるための助言をしたりして支援していきたい。

未来に継承したいことについての話し合いを重ね、考えを深めたことを大滝小まつりで発表する活動では、パソコンやインターネットなどを活用する力や、異年齢に対しての適切な発表方法を考えて準備することができる力をつけたい。そして、自分の住む地域の大切さを感じ、学習したことで大滝に自信と誇りをもち卒業して行く姿を期待したい。

3 指導計画表

日時	学習指導計画
5月24日(水) ③④校時	・ゲストティーチャーと出会う。 ・情報整理について学ぶ ・今後の学習の流れを知る。 ・「私の町の魅力」について話し合い、情報を整理する。
6月7日(水) ③④校時	・地域の方を招き、話を聞いて自分の町の「よいところ」「気になること」について付箋に書く。 ・情報をグレーピングして整理する。 ・各班の成果を発表する。
13日(火) ①～④校時	・実際に町にでかける。地域の方と交流したり、大学生と話し合ったりして、様子を探る。 ・発見したことを付箋に書いて、模造紙にはる。整理した情報を発表し交流する。
21日(水) ③④校時	・町で見つけたことを書いた付箋を見直し、それぞれのつながりを考える。
23日(金) ⑤⑥校時	・「フィッシュボーン」の形にするために自分の意見をまとめる。
28日(水) ④⑤校時	・「フィッシュボーン」の形を用いた整理方法の説明を聞く。 ・「未来に残したい〇〇地区の口口」というテーマで、「フィッシュボーン」形式に付箋をまとめる。 ・グループ発表をして、情報を交流する。
7月6日(水) ③④校時	・出来上がった「フィッシュボーン」や今までの活動をふり返って、大滝の良さや地域に残していくこと、自分がどんな町にしていきたいかを交流する。
7月上旬 (国語科)	「ようこそ、私たちの町へ」 ・字を案内するパンフレットを作成する。
2学期	大滝小まつりに向けての発表準備 ・ステージでpower pointを使用しての発表予定? ・6年生のブースで学習した足跡を展示し、6年生児童に説明させたり、クイズ形式にして地域の人にも伝える予定。 ・成果物以外の発表はどうするか?
10月27日(土)	大滝小まつりで発表する

06 授業の展開 -全体-

目標:【全校14校時】私の地域の「未来に継承したいものは何か」を考えよう

学習過程	時	教師の指導	児童の活動	指導のポイント
つかむ・見通す	1・2	全体のめあて 私の地域の魅力、未来に継承したい大切なものは何か考えよう! 1 全体のめあてを伝える 付箋をつかつた情報整理方法を練習する 「私の地域の魅力」について話しあう 今後の学習の流れを伝える	宿題 次回までの宿題「地域の特徴を知るために、地域の人々に聞いてみたい『地域のこと』」を5個考えてくる(副読本p.8)	①これまでの学習の中で地域調べ等は行っており、どんな地域なのかというイメージは持っている。 ②この地域の未来はどうなるのか、どうなってほしいのか?想起させたい。 ③人口減少、高齢化の中では地域が生き残るには、地域の特徴と、それを活かす人材が必要と気づくことが大切である。
聴く・観察する	3・4 / 5・6 / 7・8	地域診断法WSの実践 2 -きく・かたる--、地域の人々を招き、質問をして、聞き取った内容について付箋に書く 整理したことを発表し交流する 3 -みる・あるく--、実際に地域にでかける。地域の人々や地域の外に住んでいる人と話し合つたりして様子を探る 発見したことを付箋に書いて、模造紙に貼る。整理したことを発表し交流する		④地域のことをもっとよく知りたい、もっと地域を観察したいという思いを抱く。 ⑤話を聞いて、メモをとり、まとめるという一連の作業ができる。 ⑥大学生などの地域外の人との共同作業ができる。 ⑦付箋を用いた作業が主体的にできる。 ⑧外部の人の前で自分の考えを発表できる。
考える・深める	9・10 / 11・12	4 はる・つなぐ 島同士がどのようにつながるか考える 「フィッシュボーン」の形にする整理する方法を教える 宿題 「フィッシュボーン」の形を、各自ノートにつくるよう宿題を出す 5 未来を描く 宿題をもちより、グループ内で発表し交流する 全員の意見をふまえ、「未来に継承したい〇〇地域の口〇」というテーマで、「フィッシュボーン」形式にまとめる 「フィッシュボーン」の形を見直し、どのように発表するか考えておく		⑨付箋同士の「つながり」を考え、「なぜつながるのか?」を説明することができる。共通、類似、要素、根源、発生、発展など。 ⑩すべての付箋のつながりが整理できたら、その中で、重要な付箋=背骨を並べ替えて、尾から頭に並べ替える。 ⑪キャッチフレーズを考える。
自分事にする	13・14	6 つたえあう 出来上がった「フィッシュボーン」や今までの活動を振り返って、地域の良さや地域に残していくこと、どんな地域にしていきたいか、その実現のために自分が何ができるか、を発表し、交流する		⑫グループで作成した内容を発表する。 ⑬作成した内容をふまえて、自分自身が現在と、将来で、何をしたいのかを考える。

1 全体のめあて

第1校時は全体のめあてを共有し、付箋をつかつた情報整理の方法について学び、練習する。
第2校時は、地域をテーマに情報を整理し、その方法を習得する。



2 きく・かたる

第3、4校時は、地域の人々を招いて聞き取りを行う。聞きとった情報を整理し、最後に各グループの成果を発表する。



3 みる・あるく

第5校時から第8校時は、地域の人の案内や、地域の外に住んでいる人と一緒にまちあるきを行い情報を収集する。学校に戻ったら収集した情報を整理する。



4 はる・つなぐ

第9、10校時は、「フィッシュボーン」づくりの準備作業として、聞きとりとまちあるきで収集した情報を整理して、つながりを試行錯誤しながら地域の特徴を考える。



5 未来を描く

第11、12校時は、グループでフィッシュボーンを描く。「未来に継承したい〇〇地域の口〇口〇口〇」のキャッチフレーズを決める。



6 つたえあう

第13、14校時は、成果の発表と活動のふりかえりを行う。自分自身が地域で何ができるかを考える。



06 授業の展開 -第1回-

副読本pp.5-6

学習過程	時	教師の指導	児童の活動	○全体支援 ●個人支援
つかむ・見通す	1	1 全体と今回のめあての共有 (1)自分たちの地域の未来に対する危機感を抱く (2)自分たちも地域の未来を考えてみようという思いを抱く (3)地域の未来を考えるには、地域のことをよく知ることが必要と理解する (4)地域のことを知り未来を考える方法「地域診断法」を知る (5)地域診断法を行うため情報整理ができる必要があることを理解する		○地域に対する関心を醸成する。 ○未来に継承したいものは何か問い合わせる。 ○相手のことを考え、よく知ることが大切であることに気がつく。
ルールを覚える・慣れる	1	めあて:情報整理ができるようになろう! 2 付箋に書き出す 付箋の使い方を説明する ➤ 自分の好きなことやものなどをテーマに練習することを伝える	3 島に名前をつける テーマに対して自分たちの意見を付箋に書く。制限時間内になるべく多く書き出す(3分間程) A グループ内で、順番に付箋を読み上げ、張り出す。その際、同じ内容の付箋がある人は読み上げて、出された付箋の近くに張り出す B 全ての付箋をはることができるたら島ごとに名前をつける C グループ内で成果を発表し意見を交換する F	○付箋の糊の向きが上部にくるよう注意する。 ○記入した付箋は自分の手元に置いておく。 ○付箋1枚に一つのこと、例:「テレビ」「ゲーム」と書く。 ○太いペンで大きく書くよう伝える。 ●ペンが止まっている児童にはヒントを与える。 ○友だちと話し合う中で、互いの良さや違いを認めることができる。 ○出された付箋に否定や批判はしてはいけない。 ○出された付箋の理由を尋ねる癖をつける。 ○グループで協力して学習し、意見交流を通して考えを練り上げることができる。
情報を集め・整理する	2	4 テーマを変えて行う 「自分の地域の好きなところ」にテーマを変えて行うと伝える 5 島に名前をつけ整理する 島ごとに名前をつける C ➤ 自分たちの地域がどのような地域かグループ内で話し合うよう伝える E	6 成果を発表し交流する グループで成果を発表し、意見を交換したりし交流する。 F	○伝える相手や内容に応じて、適切な方法を選んだりまとめ方を工夫したりして自分たちの提案をわかりやすく伝えることができる。
交流する	2	宿題 自分たちが地域について知っていることが少ない、どうすればより知ることができるとか? 次回、地域の人に聞きたい項目を1人で5個用意するよう宿題を出す。		

めあて:情報整理ができるようになろう!

1 全体と今回のめあての共有

全体と今回のめあてを共有する。地域の未来を考えるために、地域のことをよく知る必要があることを共有し、その知るための手法を学ぶことを告げる。



つかむ・見通す

2 付箋に書き出す

担任から、情報整理方法のルールの説明を聞いた後に、グループ(この時は地域ごとでなくてよい)に分かれ、簡単なテーマ「私の好きなもの」で実践してみる。



ルールを覚える

3 島に名前をつける

書き出した付箋を貼り付け、島ごとに名前をつけ整理する。この時点で、各グループがどのような結果だったか共有する。



情報の収集・整理

4 テーマを変えて行う

地域ごとのグループに再編成し、情報整理を試みる。テーマは「自分の地域の好きなところ」。制限時間を設定して情報を書き出させる。



情報の収集

5 島に名前をつけ整理する

ルールに則り、付箋を整理していく。整理したものを見て、自分たちの地域がどのような地域か説明できるように考えさせる。



整理・分析

6 成果を発表し交流する

成果を説明する形で、自分たちの地域がどのような地域か発表する。自分たちの地域のことをよく知らないことを認識させる。



発表・交流

06 授業の展開 -第2回-

副読本pp.7-10

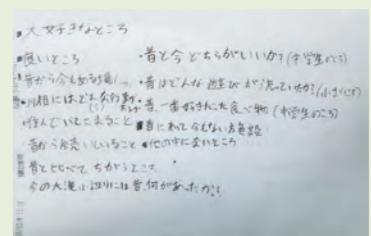
学習過程	時	教師の指導	児童の活動	○全体支援 ●個人支援
つかむ・見通す	3		<p>地域を知るための準備をしよう 15分</p> <p>① 聴きたいことを話し合う 地域の人に聞きたい事をグループ内で話し合うよう伝える</p> <p>② 地域の人を教室に招く ・地域の人を教室に招く ・地域の人に自己紹介をしていただく ・グループに分ける</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○グループで協力して学習し、意見交流を通して考えを練り上げることができる。 ○地域の人との面識を得たり、関係を深めたりする。
情報を集めること			<p>めあて:地域の人から地域のことを見たい!</p> <p>③ 地域のことを聴きだす 30分</p> <p>A A: 聽きとりの時間と手順を説明する B: 用意した質問を行ない、答えを聴きだす C: 聽きだしたことを見だしメモする</p> <p>D D: 答えが聞けたら、なぜその答えになるのか、「関連質問」をする E: 関連質問についても聴きだしたことを見だしメモする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○質問する児童と、回答を付箋に書く児童、その様子を観察する児童といった役割を決め、グループ内で順番に役割を担う。 ○全員が質問するように確認する。 ○「質問」と「関連質問」の2段階の質問を行うことで、対象事項をより深く知るように促す。
情報整理する	4		<p>④ 付箋で整理する 30分</p> <p>B: メモした付箋を模造紙に貼り付け、内容の似ているもので付箋の「島」をつくる C: 島同士がどのようにつながるかも考えさせる D: 島同士がどのようにつながるかも考えさせる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ★「なぜ?」「どうして?」「なぜ?」「どうして?」という思考を繰り返し、「なるほど」「わかった」という理解を通じて創造性が育まれる。 ○前回学んだ付箋で整理する方法を自分たちで活用できる。 ●島はなるべく小さくした方がよい。
表現する・交流する	4		<p>⑤ 地域の人へ発表する 15分 (⑤と⑥で)</p> <p>E: 自分の地域はどのような地域なのか?わかったことを整理して発表の準備をする。発表を聞いて、質問するよう伝える F: グループごとに発表する/質問する</p> <p>⑥ ふりかえる 地域の人から地域のことは聞くことができた。地域の外の人は地域をどう思うのか?次回は地域の外の人とまちあるきをして情報を集めることにする</p> <p>授業終了後は、地域の人も交えて地域ごとのグループで給食を食べるなどし交流する。代表者が今日の授業の感想とお礼をスピーチする。普段聞けないことも知る事ができ、新たな発見について意見を交換せる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○島同士がなぜつながっているのか?似ているもの、2つをつなぐ要素があるものを考える。 ○伝える相手や内容に応じて、適切な方法を選んだりまとめ方を工夫したりして自分たちの提案をわかりやすく伝えることができる。 ○地域の人やグループの友達と自分から関わろうとすることができる。また、友達と協力して提案内容を考えたり表現したりすることができる。

児童が繰り返す行動パターン:(A) リストミング、(B)張り出し、(C)キーワード付け、(D)構造化、(E)キャッチフレーズ、(F)発表・交流

めあて:地域の人から地域のことを聴きだそう!

1 聴きたいことを話し合う

地域の人に聞きたいことをグループで話し合い、質問が重複する場合は誰がどの質問をするか調整をしておく(質問事項は事前に質問シート(副読本p.8)に用意させておく)。



2 地域の人を教室に招く

地域の人を教室に招き入れ、自己紹介をしていただく。その後、地域ごとにグループに分かれる。



3 地域のことを聴きだす

質問シートをもとに、地域の人に質問をして、その答えを書きとめる。書きとめる作業は分担・協力して行う。



4 付箋で整理する

質問シートに書きとめた内容を付箋に書き写し、模造紙の上で整理する(時間がないときは、一気に張り出して整理する)。



5 地域の人へ発表する

聴きだした情報を整理した内容を、地域の人に向けて発表する。時間があれば、地域の人からコメントをいただく(時間がなければ交流時でもよい)。



6 ふりかえる

授業終了後は、地域の人と給食を食べるなどし、交流する。代表者が今日の授業の感想とお礼のスピーチをする。



つかむ・見通す

である

情報を集める

情報を整理する

発表する

ふりかえる

06 授業の展開 -第3回-

副読本pp.11-12

学習過程	時	教師の指導	児童の活動	○全体支援 ●個人支援
事前準備	-	事前準備として、役場担当者等と協議し、①各地域の案内者、②まちあるきのルート(配布用の白地図を用意)、③引率方法と担当者を決めておく。また、ルートの安全確保について関係者で共有しておく。	○手分けして、子どもたちを引率し、地域の人の案内でフィールドワークを行う。	
つかむ・見通す	5 6 7	<p>1 地域の外の人とめあてを共有する</p> <p>前回をふりかえり、今回はまちあるきをすることを確認する</p> <p>▶ 地域外の人を招き、自己紹介をしてもらい、グループにふりかける</p> <p>▶ グループ内で自己紹介をする</p> <p>▶ あらめて今回のまちあるきの目的を説明する</p> <p>▶ 諸注意、帰校時間を伝え、出発する</p>	<p>○前回のヒアリングでわかったこと、足りないことを問う。</p> <p>●初めてであろう人のコミュニケーションがうまくいくように支援する。</p> <p>○地域を、自分自身の五感で感じることが大切であることを確認する。</p>	
情報を集める		<p>めあて:まちあるきをして地域の情報をあつめよう!</p> <p>2 安全確認</p> <p>各地域において移動する。</p> <p>▶ スタート地点で案内者と合流し、あいさつし、帰着時間を確認する</p>	<p>○安全確保に常に目を配り、自動車などに十分注意する。</p>	
情報を整理する	8	<p>3 五感をつかってまちあるき</p> <p>まちあるきをする。気づいたことや発見したこと、聞いたことをメモする</p> <p>▶ 終了したら、案内者にお礼を告げ、帰校する。安全に十分注意する</p> <p>4 付箋で整理する</p> <p>「〇〇地域はこんなところ」というテーマを与える</p> <p>▶ 前回と、まちあるきで得た情報を付箋に書き出す(A)</p> <p>▶ メモした付箋を模造紙に貼り付け、整理する(B)</p> <p>▶ 内容の似ているもので付箋の「島」をつくる(C)</p>	<p>○五感で地域を感じ、メモをとるように促す。</p> <p>○第2回で地域の人々に聞き取りをしたことや、まちあるきでの気づきや発見を付箋に整理し、グループ化することで考えをまとめることができる。</p> <p>○付箋での整理も慣れ、スムーズに作業が進む。</p>	
表現する・まとめる	給食時	<p>5 地域の外の人と協力して発表する</p> <p>自分の地域はどのような地域なのか?わかったことを整理して、発表の準備をする。発表を聞いて、質問するようにする(E)</p> <p>▶ グループごとに発表する/質問をする(F)</p> <p>6 ふりかえる</p> <p>授業終了後は、地域の外の人も交えて地域ごとのグループで給食を食べるなどして交流する。代表者が今日の授業の感想とお礼をスピーチする。普段聞けないことも知る事ができ、新たな発見について意見を交流させる</p>	<p>○グループで協力して学習し、意見交流を通して考えを練り上げることができる。</p> <p>○自分たちの考えを適切に伝えることができる。</p>	

めあて:まちあるきをして地域の情報をあつめよう!

1 地域の外の人とめあてを共有する

前回のふりかえりの後、地域の外の人を教室に招き入れ、自己紹介をしてもらう。その後、グループに分け、今回のめあてを説明・共有し、帰校時間、諸注意を伝える。



2 安全確認

スタート時に安全に十分注意するよう伝える。引率者は安全確認に常に目を配り、十分注意する。地域を、自分自身の五感で感じることが大切であることを確認する。



3 五感をつかってまちあるき

美しい景色、川のせせらぎ、木々の匂い、鳥の声、おかしな看板、面白い建物など、五感で地域を感じ、メモをとるように促す。



4 付箋で整理する

地域の外の人と一緒に、まちあるきのメモを付箋に書き写し、模造紙の上で整理する(時間がない場合、一気に張り出して整理する)。



5 地域の外の人と協力して発表する

整理した内容を、地域の外の人と協力して発表する。時間があれば、地域の外の人からコメントをいただく(時間がなければ交流時でもよい)。



6 ふりかえる

授業終了後は、地域の外の人も交えて地域ごとのグループで給食を食べるなどして交流する。代表者が今日の授業の感想とお礼をスピーチする。普段聞けないことも知る事ができ、新たな発見について意見を交流させる。



つかむ・見通す

安全確認

情報を集めること

情報を整理する

発表する

ふりかえる

06 授業の展開 -第4回-

副読本pp.13-14

めあて:情報を整理してつながりを発見しよう!

学習過程	時	教師の指導	児童の活動	○全体支援 ●個人支援
つかむ・見通す	9	<p>1 ゴールを再確認しよう ふりかえり 前回の作業をふりかえり、最終的な成果物のイメージを共有する</p> <p>2 付箋のならべかえ 転記した付箋を使って、付箋と付箋の「つながり」を説明できるように並べ替えるよう指示する。具体的な例をしめす</p>	<p>1 ゴールを再確認しよう ふりかえり 前回の作業をふりかえり、最終的な成果物のイメージを共有する</p> <p>2 付箋のならべかえ 転記した付箋を使って、付箋と付箋の「つながり」を説明できるように並べ替えるよう指示する。具体的な例をしめす</p>	<p>○収集、整理した情報から、最終的な答えをだす段階に来たことを確認する。</p> <p>○最終的に「未来に継承したい〇〇地域のロロロロ」というフレーズにまとめることを確認する。</p> <p>○例えば、「山」「川」がなぜつながるかと考えると、「山」があつてそこに雨が降って「川」に流れしていくというAとBの間に何かしらの作用を結びつけるパターンや、「広い土地」があるから、「農業」が盛んである、「農業」があるから「祭り」があるなど、Aが原因となってBがある、というパターンを示す。</p> <p>○正解はないので、自分たちが納得するまで何度もやり直すよう促す。</p>
グループで考える		<p>3 つながりを考えよう つながりを考える 例を参考に、自分たちで試行錯誤して考えるよう指示する</p> <p>つながりを試行錯誤して考える 何度もやり直すことを指示する</p>	<p>3 つながりを考えよう つながりを考える 例を参考に、自分たちで試行錯誤して考えるよう指示する</p> <p>つながりを試行錯誤して考える 何度もやり直すことを指示する</p>	
まとめる	10	<p>4 つながりの説明を考えよう つながりの説明を考える ある程度の形がみえてきたら、つながりを別の付箋に書くよう指示する</p> <p>付箋間のつながりを書く どのように説明するか、考えをまとめよう指示する</p>	<p>4 つながりの説明を考えよう つながりの説明を考える ある程度の形がみえてきたら、つながりを別の付箋に書くよう指示する</p> <p>付箋間のつながりを書く どのように説明するか、考えをまとめよう指示する</p>	<p>○作業が進まないグループがあれば、途中経過を紹介しあい、別のグループからヒントをもらうなど工夫する。</p>
表現する		<p>5 つながりを発表しよう つながりを発表する まとめた考えを発表する</p> <p>6 フィッシュボーンの説明を聴く 次回は、今回の成果をさらに整理して、「フィッシュボーン」の形にする作業を行うことを告げる。次回までに、「未来に継承したい〇〇地域のロロロロ」を考え、それを説明するための「フィッシュボーン」の形を考えてくる。</p>	<p>5 つながりを発表しよう つながりを発表する まとめた考えを発表する</p> <p>6 フィッシュボーンの説明を聴く 次回は、今回の成果をさらに整理して、「フィッシュボーン」の形にする作業を行うことを告げる。次回までに、「未来に継承したい〇〇地域のロロロロ」を考え、それを説明するための「フィッシュボーン」の形を考えてくる。</p>	<p>○フィッシュボーンの形に整理する方法は、今回のつながりを参考にして、背骨と尾びれ、頭、枝骨に整理する。枝骨にはピンクの付箋を用いてよいことを告げる。</p> <p>○時間に余裕があれば、フィッシュボーンをノートに整理する作業にとりかかる。</p>

- 1 ふりかえり**
前回の作業をふりかえり、最終的な成果物のイメージを共有する。どのような島の名前が出てきたか確認し、新しい付箋に転記する。
- 2 付箋のならべかえ**
転記した付箋を使って、付箋と付箋の「つながり」を説明できるように並べ替えるよう提示する。具体的な例をしめす。
- 3 つながりを考える**
例を参考に、自分たちで試行錯誤して考えるよう指示する。何度もやり直し、より良いものを粘り強くみつけることが大切であることを伝える。
- 4 つながりの説明を考える**
ある程度の形が見えてきたら、付箋と付箋のつながりを別の付箋に書いてみる。全部の情報がつながることを目指す(情報はすべて地域のことであるので何かしらのつながりが必ずある)。
- 5 つながりを発表する**
つながりの説明とまとめた考えを丁寧に発表する。なぜその結果になったかを説明できるとよい。
- 6 フィッシュボーンの説明を聴く**
今回の成果をもとに、まず一人ずつが「フィッシュボーン」の形、キャッチフレーズを考えてくることを宿題とする。

つかむ・見通す

考え方を学ぶ

グループで考える

まとめる

表現する

宿題の提示



06 授業の展開 -第5回-

副読本pp.15-16

学習過程	時	教師の指導	児童の活動	○全体支援 ●個人支援
つかむ・見通す	11	めあて: フィッシュボーンのつくりかたを理解しよう!	<p>1 ゴールの確認 「未来に継承したい〇〇地域の口口口口というキャッチフレーズをつくることがゴールであることを示す</p> <p>2 仕組みを確認する キャッチフレーズを論理的に説明するものがフィッシュボーンであることを説明する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・キャッチフレーズ=心に残る印象深い文句 ○フィッシュボーンでは、背骨が軸となって、その端に、尾びれ、頭が位置する。背骨からは枝骨が広がる。この形が、背骨=地域にとって重要な要素、尾びれ=重要な要素の根幹的要素、頭=重要な要素を統合したものという構成がなされる。そして頭の方向=未来に向かって魚が泳ぐのである。
グループで考える・まとめる	12	未来を描こう	<p>3 もちよった内容を共有する 各自が作成したフィッシュボーンをグループで共有する</p> <p>どのようなフィッシュボーンにするかをグループで考える</p> <p>4 試行錯誤する 付箋を使って試行錯誤する</p> <p>5 フィッシュボーンにまとめる キャッチフレーズを考える</p> <p>模造紙にまとめる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○友達の意見を参考にしたり、聴いたことを発展的に考えたりする姿を期待したい。 ○答えを出すためにグループのメンバーで協力する。 ○他者の意見を尊重し、自分の意見を統合できるようになれば嬉しい。 ●活動の中で、ヒントになる視点を個々に伝えたり、グループでの話をまとめるための助言をしたりして、支援していきたい。 ○あきらめず、粘り強く考えることができる。
表現する		発表しよう	<p>6 グループごとに発表する 自分の地域はどのような地域なのか?わかったことを整理し発表を準備せよ。発表を聞いて質問することを伝える</p> <p>グループごとに発表する/質問する</p> <p>宿題 グループごとに進み方は様々で、早くに完成するグループもあれば、なかなか完成しないグループもある。次回に向けて、グループで再度フィッシュボーンの内容を見直しておくこと、どのように発表するかを考えておくことを宿題とする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○他のグループの発表から、参考になる点を見つけ出すことができる。

めあて: フィッシュボーンのつくりかたを理解しよう!

1 ゴールの確認

自分たちの地域では何を継承したいのかを考える、対象の地域は地球で一つしかないことを共有する。



2 仕組みを確認する

前回の作業によって、「フィッシュボーン」形式の整理方法、フィッシュボーンの仕組みを説明する。



3 もちよった内容を共有する

各自のフィッシュボーンをグループで共有する。どのようなフィッシュボーンにするかをグループで考える。



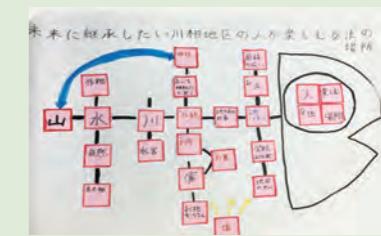
4 試行錯誤する

各自の提案と、これまで集めた情報をふりかえりながら、より良い答えを見つけられるよう試行錯誤、努力する。



5 フィッシュボーンにまとめる

未来に継承したいものを魚の頭において、それぞれの要素のつながりを、背骨、枝骨、尾びれで構成して整理し、模造紙にまとめる。



6 グループごとに発表する

次回に向けて、再度フィッシュボーンの内容を見直しておくこと、発表でどのように紹介すると伝わるか、紹介内容を考えておくことを宿題とする。



つかむ・見通す

考え方を学ぶ

グループで考える

まとめる

表現する

06 授業の展開 -第6回-

副読本pp.17-18

めあて:活動をふりかえり、今後の展開を考えよう!

学習過程	時	教師の指導	児童の活動	○全体支援 ●個人支援
つかむ・見通す		1. 仕上げとグループ内発表	フイッシュボーンを仕上げよう フイッシュボーンを仕上げる ➤ グループ内で発表方法を考える ➤ グループ内で発表の練習をする	○グループ内での発表練習を通じて、どのような発表をすれば相手に伝わるのかを確認する。
表現する・伝える	13	2. 発表練習をする	発表練習をしよう 発表を聴いて質問するようにする ➤ 全員に向けて、グループで発表し、質問を受け答える	●緊張した面持ちの児童も、役割分担をして丁寧な発見を行う。 ○それが同じ行程を経験しているため、各要素の構成への疑問などの確な質問が考えられやすいようにする。
次ふりかえる・テップへつなげる	14	3. 指摘を活かして改善する	指摘を活かして改善する 質問を参考に最終発表における、改善する	○一度目の発表と他のグループからの質問を受けて、内容を再度見直し、最終発表を行い、次の発表では、質問よりも感想や良かった点をほめるコメントが多くなる。
		4. 最終発表する	最終の発表をしよう 発表を聴いて質問するよう伝える ➤ 全員に向けて、グループで発表し、質問を受け答える	○ふりかえりでは、ゴール、ヒアリング、まちあるき、フイッシュボーンづくりの様子と成果を思い起こさせる。 ○地域の本質的な特徴と自分自身のなすべきことをリンクして考えることができる。
		5. 活動をふりかえり活かす方法を考えよう	活動をふりかえり活かす方法を考えよう 一連の作業について、何をしてきたかふりかえる ➤ 成果に対して、自身が何ができるか問い合わせる ➤ ふりかえりシート(副読本裏表紙)に記入する	○児童の発意を促す。 ○やろうと思ったことができるごとを体験する。
		6. 成果を活かす方法を考える	児童に、この成果を活かさないでよいか問い合わせる ➤ それぞれの思いをもとに、何を実施するか合意形成する	

1 仕上げとグループ内発表

まず発表準備ができているかを確認し、フイッシュボーンを完成させる。その後、発表時間の目安と質問の視点を共有してグループ内で発表練習を行う。



2 発表練習をする

全員に向けて、グループごとに発表し、質問を受けて答える。



3 指摘を活かして改善する

質問を参考に最終発表における、改善する。



4 最終発表する

一度目の発表と他のグループからの質問を受けて、内容を再度見直し、最終発表を行い、次の発表では、質問よりも感想や良かった点をほめるコメントが多くなる。



5 全体をふりかえる

一連の作業について、何をしてきたかふりかえる。成果に対して、自分が何ができるか問い合わせる。ふりかえりシート(副読本裏表紙)に記入する。



6 成果を活かす方法を考える

児童たちにこの成果を活かさないでよいか問い合わせる。それぞれの思いがでてきたら、何を実施するか合意形成する。



つかむ・見通す

表現する

表現する

伝える

ふりかえる

次のステップへ

07 実施事例

平成29年度に実施された大滝小学校6年生の授業の様子(レポート)を紹介します。

- 第1回 5月24日(木) 付箋の情報整理方法を知る
- 第2回 6月7日(水) 聴きとりをする
- 第3回 6月13日(火) 実際に地域を歩いてみる
- 第4回 6月21日(水) まちあるきで見つけたことを整理する
- 第5回 6月28日(水) フィッシュボーンを作り地域の未来に継承したいものを考える
- 第6回 7月5日(水) 活動のふりかえり
- 【授業後の取り組み】** 大滝PR動画の制作発表
- 10月6日(金) インタビューのレポート文章を作る
- 10月28日(土) 大滝小まつりでの発表

大滝小学校について

大滝小学校は、滋賀県犬上郡多賀町大滝地区にあります。多賀町は、面積の86%を山林が占め、人口は、2019年2月1日時点で7,552人、高齢化率約33%の少子高齢化が進む町です。大滝地区は、多賀町の南部に位置する11集落で構成される中山間地となっており大滝小学校の学区となっています(出典:多賀町HPより)。大滝小学校は全校生徒60名程の小規模校です。平成28年度より、特色ある教育に取り組んでいます。

多賀町立大滝小学校
: <http://taga.pcm.ne.jp/~ohtaki/>



第2回 6月7日(水) 聴きとりをする

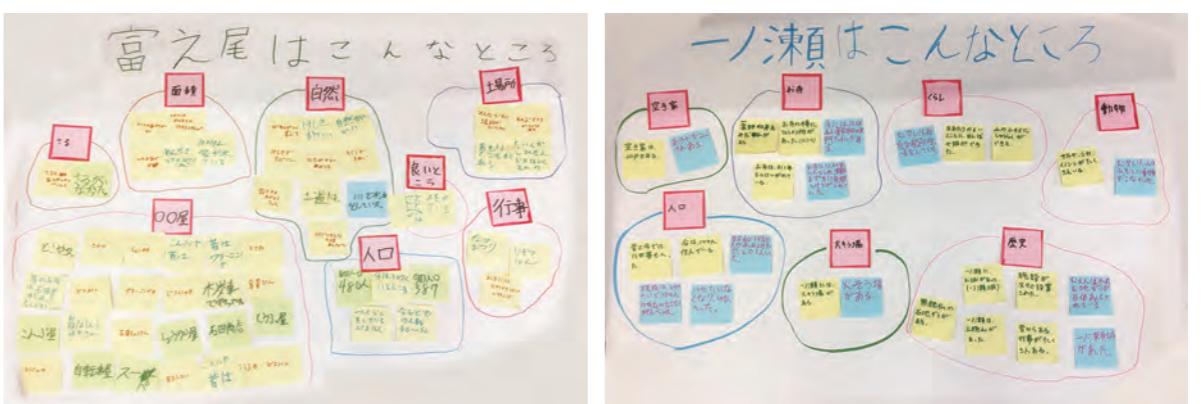
第2回は、事前に考えてきた地域のことに関する質問で、実際に地域の人に聞きとりをしました。挨拶の後、児童たちは地域ごとのグループに別れ、地域の人に、「地域の自慢したいところは何ですか?」、「昔はどんな遊びをしていましたか?」、「昔とくらべて変わったところと、今も変わらないところはどこですか?」などと聞きとりをしました。その後、聞きとりをした内容を、第1回の授業で習った付箋による情報整理の方法で整理し、グループごとに発表しました。授業終了後は、地域の人も交え、グループごとで給食を食べ、交流を深めました。次回はまちあるきなので、教員は、給食を食べながらまちあるきのコースも地域の人と話しました。



第1回 5月24日(木) 付箋の情報整理方法を知る

はじめに、私たちが地域の未来を考えいく意義について話し、地域の未来について考えるための手法「地域診断法」の説明を簡単に行いました。第1回の授業は、付箋で情報整理の方法を知ることを児童たちと共有しました。

情報整理における「つながり」の考え方として、「皆さんは何と、誰と繋がっていますか?」という問いかけをし、人と家族、家族と地域、地域と日本、日本と世界、世界と地球のように、児童の身近なところから例を広げ、物事は必ず何かのつながりがあることを説明しました。その後、実践として付箋とペンを使い、「自分の好きなこと・もの」というテーマでグループごとに練習を行いました。児童たちは初めて付箋による情報整理方法を体験しましたが、付箋が多く出され、整理もスムーズに行うことができました。



07 実施事例

第4回 6月21日（火）まちあるきで見つけたことを整理する

つながりの考え方について学び、前回のまちあるきから得られた付箋同士のつながりを考えました。連想ゲームのように考えていき、付箋のつながりの説明を書きこみました。グループごとに発表し、その後、次回作成する「フィッシュボーン」の説明を聞き、個人でフィッシュボーンを作成する宿題が出されました。



第3回 6月13日（火）実際に地域を歩いてみる

第3回は、地域の人の案内のとも、まちあるきをしました。ルートは、地域の人と相談して決めました。まちあるきでは、児童たちや地域の人に加えて、地域外の学生や社会人が参加します。これは、「よそ者」の視点で地域を歩いて、WSIに新しい気づきや発見を取り入れることが狙いだからです。地域外の学生や社会人の人たちのグループ分けをして、グループごとに自己紹介をし、教室を出ました。

地域の人が待っている場所まで歩き、地域の人に挨拶をした後、地図を片手に楽しく交流しながら歩きました。五感で地域を感じながら、新しい発見や気づきをノートにメモしました。

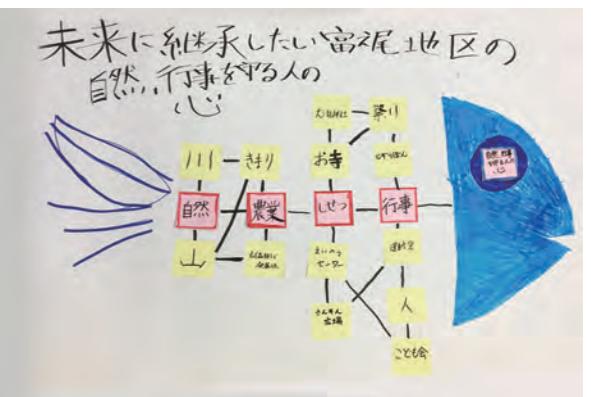


11時に学校に戻り、グループごとに分かれて付箋で整理しました。「〇〇地域はこんなところ」というテーマで、児童たちやグループ全員が、まちあるきで感じたこと、気づいたことなどを付箋に書きだしました。整理した内容を発表して、その後グループごとに給食を食べ、交流しました。



第5回 6月28日（水）フィッシュボーンを作り 地域の未来に継承したいものを考える

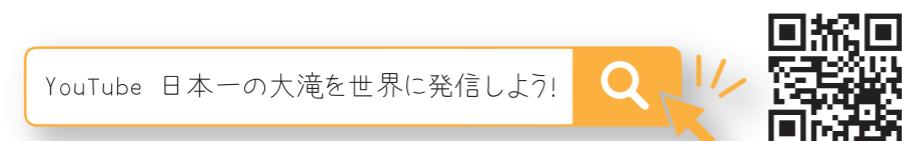
事前に作成した個人のフィッシュボーンをグループ内で共有し、話し合いながらグループのフィッシュボーンを作成しました。グループ内で共通している付箋はないか、「背骨」になる付箋は何か、それらのつながりと、何が大切なもののなのが考えていきました。そしてキヤツチフレーズを考え、模造紙に書いていきました。最後に、グループごとに今日の進捗を発表しました。



07 実施事例

2. PR動画のお披露目

児童らがレポーターとなり、大滝の魅力を発信するPR動画をお披露目しました。動画には、大滝小学校出身である楽天イーグルス則本昂大選手からのメッセージも含まれていました。制作したPR動画は、YouTubeで全世界へ発信されています。



3. 一人一人の宣言「大滝愛」

最後に、児童たちが「大滝愛」を宣言しました。
 「行事に積極的に参加していきたい。」
 「大滝が好きであることを忘れない。」
 「大滝にずっと住み続けたい。」
 「地域の人を大切にする気持ちを持って笑顔でいたい。」
 など、一人ずつ自分ができることを堂々と宣言しました。発表後は大きな拍手に包まれ、涙ぐむ保護者もいました。

発表後、各学年は体育館内に設けられたブースにてそれぞれの展示紹介を行いました。6年生のブースでは、制作したフリッシュボーンや地域に関するクイズを展示し、地域ごとの見所パンフレットを配布しました。



あとがき

地域診断法WSの「ハンドブック」(研究室HP参照)を記者発表した後、「ハンドブックがESDに活用できると「ピンときて」声をかけていた矢守ひとみ校長先生(当時・稲枝北小学校)にまずは御礼申し上げたい。稲枝北小学校で小学生向けに手法をアレンジし、実践させていただいたおかげで、多賀町大滝小学校での展開につなげることができた。

大滝小学校では、仲介・支援いただいた町職員の方々、協力いただいた地域の方々、実践にチャレンジいただいた6年生担任の先生方、校長先生をはじめ、校内研で議論いただいた先生、教育委員会の方々からは大変貴重な示唆をいただいた。厚く御礼申し上げたい。また、本研究では、大学COE事業と博報財団から研究資金の支援をいただいた。博報財団の研究助成期間中には、島根県海士町や邑南町、秋田県由利本荘市の小学校での取り組みを視察させていただき、意見交換させていただいたことで、様々な知見をいただくと共に、この手法の有用性を確認することができた。視察を受け入れていただいた皆様にも厚く御礼申し上げたい。

筆者は地域まちづくりの実践家・研究者として、実際の地域でのまちづくりにも参画させていただいている。実際の地域でビジョンを共有し、実現するには長い道のりが必要である。課題が山積する地域で、合意形成のプロセスを大切にすればするほど、前に進まなくなる。そのうちにリーダーが代わり振り出しに戻る。そんな状況に一石投じたいという思いから開発されたのが、この地域診断法WSである。

地域診断法WSで「半ば強引に」1日で地域のビジョンを決めてしまうやり方は、これまでじっくりと地域づくりを行ってきた方々からは、きっと叱りを受けると思う。しかし人口減少や技術革新、社会の変化は待ってはくれない。変化する時代の中で、自分たちの地域はどのような地域なのか、地域として何を活かし受け継げば良いのか、「不易流行」を見極め、共有することは、地方創生時代における地域主体のまちづくりの推進や、多様な地域の集合体である日本社会にとって、とても大切なことだと思う。だまされたと思って取り組んでいただくと、きっと地域の価値の再確認ができるはずである。

子どもたちの地域診断法WSの成果は、大人たちのそれと比べても遜色ないものとなる。それは、この地域診断法WSが、地域外の人も加えたヒアリングとまちあるきの2段階の情報収集と、収集した情報のつながりの解読により本質を明らかにするという仕組みになっているからである。実際、同じ地域で小学生と大人が実施した結果に大きな方向性の違いは見られなかった。もちろん、大人同士が同時に行ったグループ毎の結果も大きな方向性の違いは出てこない。収集する情報が類似していれば、結果も類似するのである。逆に、もれなく、的確な地域の情報を収集することが大切である。他地域の取り組みを導入する前に、地域診断法WSを用いて、自らの地域の本質的な特徴を把握するには、時間もかからず良い方法ではないであろうか。

小学校5年のときに「なりたい自分」をテーマに版画を彫った記憶がある。その後進路を決めるときになぜかその時の記憶にたどり着く。自分は、本当はなにがしたいのか? そう思ったときにあのときの夢はこうだったな、と思いつき起こす。しかし、残念ながらそこに「地域」というイメージはなかった。学校内と遊んだ場所の記憶が少し思い浮かぶ程度である。小学校高学年という多感で自己を確立し始める時期に、地域というインパクトを受ければ、人生が変わったかもしれない。地域診断法WSで、多様な人々との出逢いやフィールドワーク、情報収集、分析、発表の繰り返しを体験した子どもたちには、多少なりとも地域というインパクトを与えることができたのではないかと思う。人口減少の流れを変えることは難しい。しかし地域を想う人が増えることで、地域の活力を増すことができる可能性はあると思う。この手法の体験が、子どもたち自身と地域の未来を拓くことを切に願う。

滋賀県立大学 地域共生センター 鵜飼 修

本研究の成果は、研究室HP:<http://eco-minka.com/wp/esd/>(右のQRコード)に掲載しています。フリッシュボーンのでき方の動画なども掲載していますので参考下さい。
 本誌で紹介した手法を実践していただきは歓迎です。キャラクター(うーちゃんたち)も自由に活用ください。多くの地域で実践いただければうれしく思います。実践の際は、情報発信してくださり、ご報告いただければ幸いです。

